

9 刺し子 (2020年11月9日)

ある週末にパリ市内でバスに乗っていたとき、勘違いして目的地よりも手前のバス停で降りてしまいました。仕方がないので停留所で次のバスを待っていると、素敵な作品が飾られたショーウィンドーが目に留まったので、お店に行ってみました。そこは手芸用品店で、「Broderie Sashiko」(刺繍刺し子)と書かれた本や刺し子の制作キットが売られていました。パリで刺し子が売られていることに驚き、どのようにして刺し子がフランスで広まったのか知りたくなりました。そこで、パリで刺し子の普及に努められている佐久間聡美さんにお話を伺いました。

佐久間さんは、パリでファッション関係のお仕事をされた後、和風の小物などを制作されていました。ある時、出版社から刺し子を紹介する本の執筆を依頼され、2012年に「Broderie Sashiko」を出版しました。フランスで有名な手芸サロンで刺し子を紹介したところ、生地は藍色と白い糸のコントラストが人目を引いて、とても評判がよかったそうです。

刺し子とは、日本の伝統的な刺繍で、しばしば綿や麻が使われます。ぐし縫い(運針)という縫い方で、布表に縫い目が見えるように直線に縫っていきます。縫い目を点線のようにして模様を描く一般的な刺し子だけでなく、縫い目を組み合わせることで模様にする一目刺しがあります。複雑な模様を作るときでも、必ず直線に縫うのが刺し子の特徴です。単純な縫い方で複雑な模様を作り出せることから、刺し子に挑戦するフランス人が増えています。伝統的な刺し子は幾何学的な模様が多く、デニムとも相性が良いので、男女問わず幅広い世代に受け入れられています。最近は、伝統にとらわれない模様が増えて、多彩な色の糸も使われています。



パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本



さらに、「ぼろ」も人気が高まっています。「ぼろ」とは、文字通りぼろぼろになった布に別の布を重ねて継ぎ当てすることです。そもそも刺し子は、傷んだ着物を繕うだけでなく、糸を縫い付けることで布を丈夫にする役割があります。布が貴重であった時代に、着物を長持ちさせるための先人たちの知恵でもあります。

日本の刺し子は、今ではフランスのファッションにも取り入れられて、ますます発展する可能性を秘めています。